生存科学研究所ニュース

Vol.4. No.5. 1989. 9.10発行

目　次

●オタワ憲章と生存科学……山口　正民……1
●第46回生存科学研究会
「地球環境と生存科学」……不破敬一郎……2
●生存科学ビューポイント……4
●エッセイズ・キュート……5
●維持会員だより……5
●ニュース・オブ・ニュース……7
●公益信託武見記念生存科学研究基金ニュース……9
●お知らせ……10
●編集後記……11

発行：財団法人 生存科学研究所
〒104 東京都中央区銀座4-5-1
聖書館ビル303
電 話 03-563-3518

そのまま使い始めてから、現在では技術提携で何とか自立する形に至ったのではないかと自負しています。

さて本旨に入りますが、エリザベスとの少ない会話の中で、「すべての悲嘆は怒りになる」といった彼女の一言がごく最近まで理解しきれなかった……ということは、このワークの唯一の単純な技法が、そしてその効果のよって来たる所以がつかみきれていなかったということにもなります。なぜなら、私の中で『悲しみと怒り』は異なった感情としてとらえていたからです。

取り返しのつかない悲しみ、やり場のない悲しみ（当然この中にはターミナルが含まれます）の中には、必ず「神も仏もないものか」という思いが共存している。これは洋の東西を問わず全く共通です。時間と共に悲しみは次第にこの思いと置き代わって行き、そして遂に、やり場のない爆発的な怒りへと累積されて行くのです。国民性、アイデンティティー、社会の伝統的習慣などからでしょうか、白人社会では怒りのピークに至るまでが速く、日本人の場合は感情を押さえ込む努力が美徳視されている風潮からか、ピークに至るまでが比較的長いようで、前者は平均数ヶ月であり、後者は１～２年以上といったケースが多いようです。(云うまでもなく、一部はあきらめの心境に至るケースもあり、これも割合でみると白人の方が少ないようです）以上のことが、理解出来なかった理由だったのかもしれません。

極限近くにまで追い込まれた様々なマイノリティー感情を、エリザベスは『ゆがんだ不自然な感情』と総称し、それは人を蝕み、よりよく生きることも、そして死ぬことも不可能にすると説いています。

このワークショップで行う手法はただ２つだけです。誰かれという順序はなく、整然とただ１人ずつ進み出る。皆なの前に出て座り、自分の重荷の苦しさを極めて率直にさらけ出して存分に語り尽くします。話す人も聴く側も、お互いがどこの誰だか分からない仕組みになっていて、しかもそこに集まっている人すべてが色々な苦しみを共有しているからこそ語り尽くせるし、又、交互に聴けるのです。

語るにつれて「なぜなんだ！」の怒りが吹き出し始め、ごく自然に目の前の硬いゴムホースで、ぶ厚い電話帳をたたきこわす行為に引き込まれて行きます。電話帳は、一部の人にとっては加害者そのものである場合もありますが、ほとんどの人にとって、それは〝神〟なのです。この場合の〝神〟とは、必ずしも白人社会の〝ゴッド〟を指すのではなく、人間の運命に対する支配者の総称です。神に怒りをぶっつけ神をののしる。これ以上に端的な怒りの表現はないでしょう。神へのタブーを破ってもよい場所、それは，この閉鎖された数日間の小宇宙、ここしかないと説明されているからなのです。

その激しさの度合いは想像を絶するものです。普通の人間が、これ程激しく怒号嬌声を発し、泣き叫びながら狂ったように〝怒る〟有様は本人も全く思いがけないほどです。場内は水を打ったように静かで、〝静中の動〟が一段と際立ちます。ほとんどの人が手が上らなくなるまで、息が続かなくなるまで……終りの１、２分、その姿は自分をたたきしめているクールなものへと変化して行き、そして超越あるいは解放の感覚を体験するのです。

怒りをどこに向ければ良いのか分からない悲しさがここで具現化されるからです。

これを3泊4日（80人をリミットに数十人ともなれば4泊5日になる）の間に多くの人達が完結させるプロセスを、いかにスムースに、いかに満足に獲得して終わらせるか。全スタッフの顔は常に物静かでにこやかであり、そして心中、緊張で張りつめ、疲労困憊の極に達したところで終了の日を迎えます。『ゆがんだ不自然な感情』はすべて怒りという共通性に至ることに、ようやく昨今、気付きました。怒りこそが人間の感情の最もシンプルで根源的なものだったのです。このワークショップが怒りを吐出、放出させるための唯一の技法にしぼり込まれ、その結果、想像を絶する効果をもたらします。それはすべての人に共通な、素朴で素直な本来の人間感情を掘りおこしているからに他なりません。

精神科疾患はすべて参加させない医学的見地からも、本療法が〝癒し〟ではあっても、〝医療〟ではなく、特に日本の制度では医療概念にはならなくても、厳然たる〝治〟の行為以外の何ものでもない……当分私は、この矛盾した狭間を歩まなければならないと覚悟している次第です。

皆様のご協力、ご鞭撻を切に願ってやみません。

＊　＊　＊　＊

維持会員異動・寄付のご紹介

（平成元年6月1日～7月31日）

入　会

・個人

藤田　雄三　　神戸製鋼所東京本社
　　診療所歯科医長

岩澤　　章　　岩沢医院

・法人

宗像医師会病院

宗像医師会

寄　付

・個人

山口　正民　　50,000円

ニュース・オブ・ニュース

研究所日報

7月15日　第1回総合健康問題研究委員会、財団企画委員会、基金企画委員会、総合調整委員会合同会議

7月27日　第1回市原市地域包括医療システム検討委員会

7月29日　平成元年度第1回財団・基金合同顧問会

7月29日　第1回懇談会

8月5日　8役会

8月10日　第2回市原市地域包括医療システム検討委員会

8月17日　第3回市原市地域医療システム検討委員会

8月24日　生存科学研究所・市原市「市民のための健康づくり計画」第1回シンポジウム

＊　＊　＊　＊

第1回総合健康問題研究委員会・財団企画委員会・基金企画委員会・総合調整委員会合同会議

7月15日（土）午前10時から、研究所会議

室において表記の会議が開催された。

これは、ニュース前号でも紹介した平成元年度事業計画に基づく、研究事業の本格的スタートにさいしての合同会議であり、実践的な研究の中心となる総合健康問題の研究を始め、財団・基金にわたる全研究事業に関して、研究企画に携わる全員の理解を深め総合的に研究成果を高めることを目指し、全て合同会議の形式で行われた。

総合健康問題研究とは、生態学的な基盤に立った幅広い地域包括医療に関わるものであるが、社会一般への理解を得易くするためこのような名称となった。

会議は熊谷理事長も出席され、先ず新しい研究体制一般についての説明があり、次いで、総合健康問題の地域での実践的な研究のための受託ならびに協同研究に関して、千葉県市原市、福岡県宗像医師会等との現在の状況について説明があり、研究体制の整備、研究の進め方について協議された。さらに、ハーバード大学武見講座、特に武見国際シンポジウムと武見フェローについて、また研究所関西支部の活動等について協議された。

＊　＊　＊　＊

第１回市原市地域包括医療システム検討委員会

生存科学研究所は、総合健康問題の実践的研究の一貫として、千葉県市原市の「市民の健康づくり計画」の一翼を担うシンポジウムを市原市から総合健康問題研究委員会総合委員会の山口委員長を中心として、引き受けることになった。その準備のために、総合健康問題研究委員会のプロジェクト委員会を結成し、これを「市原市地域包括医療システム検討委員会」と命名、７月27日（木）午後３時から、その第１回会合を開催した。

準備委員会の委員長は梅園忠包括医療システム研究委員会委員長が兼任するが、今回は特に、山口委員長も出席された。市原市からは環境保健部保健衛生課鵜沢主幹他一名が来所し、計画の趣旨、関連資料の説明が行われた。シンポジウムは８月、９月にかけ３回開催され、健康福祉都市市原市の確立をめざして行われる。

研究所は、市原市からこの他にも、市原市が行った住民意識調査の分析についても受託する予定である。

＊　＊　＊　＊

平成元年度第１回財団・基金合同顧問会

７月29日（土）午前11時30分から、研究所会議室において今年度の第１回顧問会が財団と基金の合同で行われた。財団の小西顧問、

近藤顧問、宮島顧問、基金の大江顧問、板垣顧問が出席され、熊谷理事長を囲んで和気藹藹のうちにも真剣に話しあわれた。

まず、生存科学研究基金の設立に際して武見先生が書かれた趣意書、財団・基金の研究組織と運営、研究の現状等が小平専務理事から説明され、そのあと顧問の方々から、財団・基金の活動や将来について、生存科学・生存の理法・生存秩序の意味するところについて、その研究方法について、学術会議等最近の「人間」への関心の高まりと生存科学研究の意義について等々が話題とされた。

＊　＊　＊　＊

第１回懇談会

顧問会のあった同じ29日午後４時から、研究所会議室において第１会懇談会が、熊谷理事長陪席の下に開催され、熱気に溢れる懇談が長時間行われた。懇談会開催の趣旨は、開催に際して小平専務理事が説明されたように、生存科学や研究所の活動について広く社会に理解して頂くためと、より広くからいろいろな研究情報や研究へのアドバイスを頂けるよう、また、研究に参加して頂けるようにということで、生存科学研究と関わりの深い、また関心を持っておられる若手の研究者、行政官、マスコミの学術部記者、実践家等をお誘いしている。同様の目的で今回は評議員の方々もお誘いをしている。

公益信託武見記念生存科学研究基金ニュース

基金日報

７月15日　第46回生存科学研究会
８月５日　第４会医薬品産業組織のあり方研究会
同　第８回生命倫理の理念と科学的接近研究分科会
８月30日　第７回武見文献による生存の理法研究会および哲理分科会

＊　＊　＊　＊

生存科学研究会分科会改組

ニュース前号に紹介したように、平成元年度から財団と基金の協同研究体制が大幅に改正されたことにともない、これまで行われてきた、生存科学研究会分科会も改組されることになった、上記の分科会をもって、昭和63年度の分科会は全て一応終了し、報告書の作成ならびに発表方法の検討を残すのみとなっている。第46回生存科学研究会の際に紹介したように、平成元年度の研究分科会のテーマや組織編成は、会員からの希望を受けて行われるので、会員諸兄の御希望を研究企画委員会または幹事までお寄せ頂きたい。

前年度中の、まさに手弁当の熱心な基礎的研究が、今年度の、より実践的で具体的な新しい研究の基盤となっており、今後ともこのような研究への情熱の火を絶やすことなく、活発な研究が行われることが望まれる。

＊　＊　＊　＊

新規加入　生存科学研究会員
藤田　雄三

お知らせ

学術誌「生存科学」への投稿の御案内

生存科学研究所では、学術誌として「生存科学」(Journal of Seizon and Life Sciences)を半年刊で刊行することとし、第1号を本年12月に出版する予定にしております。

つきましては、生存の理法、生存科学の基本問題から、総合科学としての生存科学を構成する人文、社会、科学技術の専門領域の立場による皆様からの投稿を心から歓迎いたします。(別記の投稿規定を御参照下さい)

学術誌は、生存科学研究会会員および生存科学研究所維持会員へ配布いたしますので、まだ本研究会の会員でない方は、この機会に会員としてご加入になり、研究活動にご参加されることをおすすめいたします。入会ご希望の方は、生存科学研究所へご連絡下さい。

〔投稿規定〕

本研究所では、誌上討論（テーマを予告）に関する論文および研究論文の投稿を歓迎します。投稿論文に対しては審査が行われ、場合によっては改稿を求められますから、御承知おき下さい。なお、プログレス・レポートに対しては、審査は行われません。

1）投稿原稿の種類

種　類	内　　容	刷上りページ	審査
原著論文	生存科学に関するオリジナルな研究開発の成果	平均6P	あり
プログレスレポート	新しい研究・開発の進展状況の報告	平均4P	なし

注　刷上りページは、題目、抄録、図表、引用／参考文献、著者紹介など、すべてを含めるものとする（刷上り1P＝400字×4P＝1600字)。

2）原稿用紙

原稿用紙には、ヨコ書き400字づめのものを使用して下さい。できるだけワードプロセッサで作成したものをお願いしますが、その際にはA4版用紙を御使用下さい。

3）原稿の書き方

(1) 原稿の第1ページに表題、著者名、所属を日本語と英語で記入し、その下に余白を設けて、100－250語の英文抄録を書いて下さい。また、最後に日本語と英語で5－10のキーワードを記入して下さい。

本文が英語の場合は、ダブル・スペースで印字するものとし、表題、著者名、所属を英語と日本語で記入し、300－600字の和文抄録を書いて下さい。最後に、英語と日本語で5－10のキーワードを記入して下さい。

(2) 図（または写真）は図1（Fig. 1)、図2（Fig. 2)、表は表1（Table1)、表2（Table2）のように指示し、その内容がわかるように簡単な説明（キャプション）を付けて下さい。図や表は、刷上り寸法の約2倍の大きさで、黒の鉛筆またはインクを用いて下さい。

4）投稿論文の扱い

編集委員会が定める査読委員による審査に基き、編集委員が採否を決定します。査読に当っては、投稿者および査読者の両者の氏名、所属等の秘密が保たれます。査読の結果は、原則として1か月以内に報知

いたします。

5）別刷り

原則として、投稿者には別刷30部をお送りします。30部以上の別刷りを必要とされる場合は予めご連絡いただければ適性な価格でさし上げます。

6）その他

原著論文、プログレス・レポート以外にも、会員だより、あるいは最近お読みになった文献の紹介・書評などの投稿を歓迎します。

7）原稿の送付先

元原稿とコピー1部と著者（共著の場合は代表著者）の連絡先（住所、電話番号）を記入したものを下記に送付して下さい。

〒104　東京都中央区銀座4－5－1
聖書館ビル303
生存科学研究所「生存科学」係
TEL　03－563 －3518

＊　＊　＊　＊

第47回生存科学研究会のお知らせ

日　時：平成元年9月30日（土）
午後2時から5時まで
今回は臨時に第5土曜日ですのでご留意ください。

場　所：国立がんセンター内国際研究交流会館2F　No. 2
中央区築地5－1－1

I．年間テーマ「地球環境と生存科学」
シリーズ第3回

講　師：三井業際研究所常任委員
向山　定孝

尚、矢口光子（社）農村生活総合研究センター専務理事の予定は講師の御都合で変更になりました。御了承下さい。

II．武見フェロー研究報告

テーマ：「開発途上国における病院プロジェクトの課題―ボリビアの事例研究から」

講　師：昭和63年度武見フェロー
国立病院医療センター国際協力部
厚生技官　上原　鳴夫

＊　＊　＊　＊

第48回生存科学研究会

日　時：平成元年11月19日（土）
午後2時から4時半まで

場　所：大手町　経団連会館

年間テーマ「地球環境と生存科学」
シリーズ第4回

テーマ：「発展途上国における産業化と環境問題」

講　師：元国連アフリカ経済委員会顧問
元WHO顧問　大瀬　貴光

お願いとお詫び

ニュース前号（Vol. 4、No 4）の生存科学ビューポイントのタイトル『人類生存の単価としての「家庭」』の単位が単価となっておりました。「価」を「位」と御訂正下さるようお願いします。

読者諸兄、特に御寄稿の中村賢先生には大変申し訳けなく、お詫び申し上げます。

編　集　後　記

新しい研究体制の下での実践的研究が始まりました。健康づくりの現場での実践と関わる実験的研究とも言えましょう。

また研究所から生存科学研究の学術誌が発行されます。生存科学への理解を広めるために役立ち、また研究発表の場としておおいにご利用頂けると期待されます。（N）